

## 皮膚科学領域雑誌の展望

荻野篤彦

新着したばかりの雑誌をめくる時のわくわくした気分は誰でも味わうものであろう。まして自分が投稿した雑誌なら印刷された自分の原著論文との出会いは大きな感激である。また執筆中の時には同じ内容の論文が誰かに先を越されて書かれていないかどきどきしてまず目次に目をやるものである。稀な症例と思って投稿した臨床論文が特集号で類似の症例とまとめて一括掲載されていると全くがっかりしてしまうこともある。同じテーマで研究している者にとっては雑誌の上が競争の場であり、情報交換の場でもある。楽しくもまた厳しい場である。また臨床家にとっては雑誌は生涯教育の場を提供してくれており、日頃、疑問に思っていた症例や治療法について解決のきっかけが得られた時にはありがたいと思う。偶然にも知人の論文を見つけた場合など長年会っていない旧友に再会したような気分になる。雑誌は単に学術論文の掲載誌というだけでなく、国内や国際学会の案内、学会の広報記事、人事往来、地方会の抄録、学会印象記、随筆など盛り沢山の情報の宝の山である。

雑誌には学会が発行する機関誌、出版社が投稿論文を掲載する商業雑誌、大学が教室員の主に研究成果を報告する目的の紀要などがある。各雑誌にはそれぞれ掲載論文の内容に傾向があるので、投稿者はそれを見極めて原稿を送る。また当然編集者が雑誌の性格づけをしているので各号により内容および傾向が著しく変わることはない。雑誌がいかに充実しているかは編集委員がどのような態度で取り組んでいるかに懸かっているようである。

おぎの あつこ：国立京都病院皮膚科医長

専門の審査員の厳しい目を通り、修正を繰り返しながら推敲された論文を掲載する雑誌なら自ずと手ごたえのあるものになっている。しかし、最近、専門医資格の取得が目的で投稿する若手の医師の臨床論文数が激増しており、1年以上待たないと掲載されない雑誌も出てきた。情報量は急激に増加しているがそれが有用なものかどうか判断することが次第に困難になってきている。

以下、皮膚科領域の主な雑誌を簡単に紹介する。

### 1. 国内雑誌

#### (1) 日本皮膚科学会雑誌（東京）

日本皮膚科学会が発行する機関誌であり、毎月会員には届けられるので図書室には必要ないとも思われるが、他科の医師のために参考になる論文もあるし製本されたものが保管してあったほうが便利である。明治33年、皮膚病学会が発足し、欧州で皮膚科を研修し、のち東大皮膚黴毒学教室の教授となった土肥慶蔵先生が会長に就任した。その機関誌として明治34年に発刊された「皮膚科学及泌尿器科雑誌」（第1巻、第2巻）が本誌の始まりである。内科系の皮膚科と外科系の泌尿器科がなぜひとつの科として存続していたのかは詳しくは分らないが、ひとつには明治時代には現在のエイズのように恐れられた梅毒が蔓延しており、性病は国が取り組むべき大きな課題であった。このことから皮膚科は性病を泌尿器科と協力して診療・研究する科としての役割が担わされており、講座名も「皮膚黴毒学教室」となっていた。さらに土肥教授がドイツより膀胱鏡を導入したという経

緯から泌尿器科の患者も診療することがあったからともいわれている。大正末ころより泌尿器科を皮膚性病科より分離する気運がおこり、その後次第に各大学で独立するようになり、独自の学会もつくられるようになったので泌尿器科の領域を分離し、昭和17年新しく「皮膚科性病科雑誌」と名を変えて発行された。その後、皮膚科は性病科としての性格が弱くなったので昭和32年に「日本皮膚科学会雑誌」(第67巻)と名称を再度変更して発行された。

本誌は研究、臨床の原著論文が主体で、若手の研究者の研究論文が多く掲載されており、学位取得のための論文となることが多い。編集委員会の審査も厳しく、論文審査員の意見が論文に磨きをかけ、数回の修正が繰り返されて論文の内容が一層充実してきた。すこし内容が固いので臨床医が気楽に読む雑誌というわけにはいかない。むしろ後に載る地方会の発表の抄録は臨床に興味をもつ医師にとって参考になることが多い。さらに後記の学会からの広報は専門医資格取得のための研修会の開催など学会情報がまとめて載っているので会員には見逃せない。

### Journal of Dermatology (Tokyo)

本学会から昭和49年より発行された欧文雑誌で、我国の皮膚科学に関する論文が初めて本邦から世界の皮膚科学にデビューしたことになる。当初、購読者が少なく発行は経費の面で学会のかんりの負担になっていたが、次第に会員数も増加し、昭和61年A4判に切り替えられ紙質もよくなり、表紙も一新して平成2年より月刊誌となり世界に恥じない欧文誌となった。今後外国からの投稿論文が増えることを期待したい。

### (2) 皮膚科紀要(京都)

編集部が京大皮膚科教室にあるため京大の教室員および関係者の論文が圧倒的に多く掲載されている。第1巻は大正12年(1923)に松本信一教授の御努力の下で刊行され、門下生による黴毒を中心とする研究論文が次々と発表された。その後も日本皮膚科学会雑誌に負けない内容の原著論文が掲載され、内外で多くの購読者を得て定期的に発行

されていた。しかし一時、学園紛争時には廃刊の危機に見舞われたがなんとか合併号でしのぎ、その後は順調に勢いを盛り返しており、季刊号ではあるが1992年には第87巻となっている。以前は研究論文が主体であったが最近では若手の医師の臨床論文も多くなり実地医家にも抵抗無く読める論文も増えてきている。英文論文、日本語の論文、英文抄録付の日本語論文などと多種の論文が混ざり合っている。表紙は一貫して白黒に統一されてやや地味な印象を受けるが内容は多彩で充実している。後記に近畿皮膚科集談会の発表演題の抄録が掲載されている。

### (3) 西日本皮膚科(福岡)

現在は日本皮膚科学会の下部組織である西日本連合皮膚科学会の機関誌になっており、編集部は九大皮膚科にある。もともと第1巻は昭和8年に「皮膚と泌尿」の名称で皮膚科皆見省吾教授と泌尿器科高木教授の尽力で発行された。戦争で一時廃刊の憂き目をみたが昭和25年に再刊された。性病科学という共通地盤で結ばれていた皮膚と泌尿の両学会は分離独立が実現し、大学での講座も分離したので、本雑誌でも分離発行が長年の懸案になっていた。昭和43年、会員のアンケート調査により59%の賛成を得て、抵抗はあったが第30巻で廃刊とし、翌年新しく「西日本皮膚科」の名で第1巻が発行された。

表紙をひらくと鮮やかなカラー写真の図譜が目に入る。カラー写真をふんだんに使うことは費用は相当かかるが皮膚科の医師にとっては何よりもありがたいことである。本誌は臨床論文がまずはじめにきて、つぎに研究論文、治験論文と続く。熟達した皮膚科医の経験に基づく臨床論文はなかなか読みごたえがあり、あすの外来診療に役立つようなものも多い。悪性リンパ腫(ATL)、真菌症、乾癬治療、皮膚付属器腫瘍などのテーマで多くの臨床論文が掲載されている。

後記には最近発行された主だった皮膚科専門雑誌の論文名(以前は抄録も)が載っており、なじみのうすい真菌関係の雑誌も紹介されていて便利である。教室員の努力で続いていた外国誌の和訳抄録が廃止になり論文名のみとなってやや残念で

ある。

#### (4) 皮膚(大阪)

本誌は大阪地方会の機関誌として昭和34年に第1巻が発行された。巻頭にはクリニカラーとして臨床、組織、電顕など豊富な内容の図譜が載っている。論文は臨床論文が主で研究論文、治験論文と続く。特集号として皮膚アレルギー研究学会、皮膚パッチテスト研究学会の発表演題が論文として掲載される。大阪地方会の演題抄録の掲載が後記にある。

#### (5) 臨床皮膚科(東京)

本誌は機関誌ではなくいわゆる商業雑誌であるが、長年編集委員のひとりに慶応大学の旗野教授が入っており、その後西川教授が引き継がれたので、慶応大関係者の論文が比較的多い。本誌は以前「臨床皮膚泌尿器科」として発行されていたが、ただ単に性病を通じて結ばれていた両科は全く別の領域の学問でありいつかは必然的に独立する気運にあった。昭和41年度には全国の国立大の両講座は完全に分離することになり、同年本誌も第20巻で終わりとなり分離されることになった。翌昭和42年、新たに「臨床皮膚科」第21巻として出発した。臨床論文は全国から投稿されるので多彩であるが全体に慶応大の特色である膠原病、水疱症に際立った論文が集中し、ついで病理組織を中心とした皮膚付属器腫瘍の論文も多い。

#### (6) 皮膚科の臨床(東京)

本誌は一貫して皮膚科の臨床論文を掲載しており「臨床皮膚科」と双壁をなす皮膚科専門の商業臨床雑誌である。原著論文では皮膚悪性腫瘍、悪性黒色腫、皮膚癌、付属器腫瘍、真菌症など多彩である。巻頭言の担当は最近では教授から若手の研究者や病院の皮膚科部長に移り、現場の苦勞や人生観が滲み出ていて楽しみな読物になっている。カラー図譜も大きく一頁を占め見ごたえがある。最近話題になっている疾患の総説は知識の整理に役立つし、教育的な価値も高い。その他、学会印象記、座談会、海外の学会の印象記や旅行の随筆、「切手でみる皮膚科学」など楽しい企画が多い。

#### (7) 皮膚病診療(東京)

皮膚科開業医を主たる購読者と焦点を絞って発行された純粋に臨床的な商業雑誌で第1巻は1980年に発行された。毎号、なんらかのテーマで特集を組み、写真はすべてカラーで載せ、臨床の現場で広く応用できるものになっている。外来に保管しておき患者の病状の説明に使えるし、鑑別診断にも使用できる。臨床症例論文だけでなく基礎研究のレビュー、話題の疾患の総説などあり生涯教育の教材として最適である。豊富なカラー写真で埋まっている臨床中心の雑誌であるから他科の医師にも活用することが可能である。

## 2. 海外雑誌 欧文誌

### (1) Archives of Dermatology (Chicago)

1919年に第1巻が発行された代表的な皮膚科専門誌で米国のAmerican Medical Associationから月刊で発行されている。1991年には127巻に及んでいる。編集審査は厳しくほとんどの投稿論文は一度ならず突き返されるが、再度修正して採用されれば皮膚科医にとって非常に名誉なこととなる。当然、創造性が尊重され、他の論文に少し変化をつけたような独創性の欠ける論文は決して採用されない。我が国からの論文も次第に増加しており世界の第一線で活躍する若い医師の活躍が期待される。OFF-CENTER FOLD といって折り畳んだ細長い頁にクイズ形式の演題の出題があり研修医の参考になる教育的記事である。エイズなど感染症の疫学的報告もあり米国の生々しい現場を知ることできる。Correspondenceには興味ある症例報告が掲載され、誌上の質疑応答も盛んで、臨床医の興味をそそるコーナーである。

### (2) British Journal of Dermatology (Oxford)

英国皮膚科医協会の機関誌で第1巻が1888年に発行されたという古い歴史をもつ。1979年に100巻記念号を発行し、病名に発表者の名前がついた特異な疾患について名付け親に再度その疾患について語らせている。臨床論文はとくに研究を加味したものが多く、報告者も英連邦の国々から数多

くのぼっており、熱帯皮膚病など珍しい疾患の報告も多く見られる。

(3) **Acta Dermato-Venerologica(Stockholm)**

スウェーデンのウプサラ大学病院の教授が編集主幹となって年6回発行されている皮膚科専門誌で、免疫学を基盤にしたアレルギー性疾患に関する論文が主で、発想のユニークなものが多い。英文は簡潔で読みやすい。研究論文と臨床論文が半々で、我が国からの投稿論文も多く見られる。1992年で72巻を数える。特集号として増補版(補遺)が時に出されている。

(4) **Dermatology (Basel)**

皮膚科専門誌として歴史は古く創刊は1893年で、ドイツ語で書かれた雑誌として *Dermatologische Zeitschrift* と呼ばれていたが、1939年からは *Dermatologica* と名を変えてドイツ語以外にフランス語、イタリア語、英語での論文が載るようになった。最近ではほとんどの論文は英語のもので占められるようになり、雑誌の表題も *Dermatology* とされた。Karger が出版するいわゆる商業誌で臨床論文、症例報告が主体で欧州や日本からの論文が多い。1990年には181巻になっている。

(5) **Journal of Investigative Dermatology (New York)**

米国並びに欧州の皮膚科研究学会の機関誌で世界の皮膚科学研究の最先端をゆく研究成果を掲載した雑誌である。編集審査も厳格で採用されれば名誉なことと思われる。世界の皮膚科学の研究分野をリードするような雑誌であり、今のところ我が国からの論文の掲載もそう多くはないが少しずつ増えてきている。1992年には98巻となっている。

(6) **Archives of Dermatological Research (Berlin)**

歴史は古く1869年にさかのぼる。元来はドイツ語で書かれた皮膚研究論文を掲載する雑誌で、1992年には284巻になる最も長寿の皮膚科雑誌である。数度、雑誌名の変更があり現在の名称にな

ったのが1979年第264巻からで、論文はすべて英語で書かれるようになった。ドイツが論文を英語で書くことを指定するのは画期的なことであり、ドイツ語の苦手な我が国の若手の医師の投稿もこれで可能になったことは悦ばしいことである。

(7) **Contact Dermatitis(Copenhagen)**

産業皮膚障害における原因物質を探るうえで参考になる雑誌である。我が国からの投稿者も多い。

(8) **Hautarzt (Berlin)**

Springerが発行するドイツの権威ある臨床雑誌であり、臨床写真は驚くほど鮮明であるがドイツ語で書かれているため全文を理解することは相当困難である。最近短い英文抄録が付いたので理解の助けにはなっている。以前、当院図書室でも所蔵されており棚に陳列されていたが時代の趨勢には勝てず代わりに *Acta Dermato-Venereologica* を購入することになった。

(9) **Journal of Cutaneous Pathology (Copenhagen)**

1974年創刊の米国皮膚病理学会の機関誌で、病理組織学的に興味ある症例報告が掲載されている。

(10) **International Journal of Dermatology (Philadelphia)**

症例報告もあるが、興味ある皮膚疾患のレビューによる総説が主であるから最近の考え方や文献を探すのに便利である。

(11) **Clinical Experimental Dermatology (Oxford)**

1976年創刊の臨床雑誌で典型例の症例報告が載っており教育的な面で役立つようである。

(12) **Journal of the American Academy of Dermatology (St. Louis)**

米国皮膚科学会の実地医家向けの雑誌で生涯教育ができるような配慮がなされている。会員は掲載論文を読んだあと自己評価できるようなシステムになっている。論文も臨床中心で臨床の現場に

直接役立つことを目指しているようである。

### 3. パソコンによる皮膚科文献検索

実地臨床で手軽に皮膚科文献が検索できるデータベースが八代総合病院の林原利朗先生によって作製された。われわれもこれを入手して皮膚科および当院図書室のパソコン上で日常手軽に検索している。これによりここ10年間の主要な国内の5つの皮膚科雑誌の文献を瞬時に探し出すことがで

きて重宝している。先生の努力で新しいデータが毎年追加入力されており、連絡すれば御好意により送られてくるようになっている。わたしも「皮膚科紀要」と「皮膚」の文献を入力しようと努力しているところである。

参考までにその内容を紹介した文献を挙げておく。

林原利朗：パソコン・ワープロによる皮膚科文献データベース構築の試み、臨床皮膚科 44(12)：1201,1990.

## 第66回 研修会 プログラム

日時：1992年12月15日(火) 10:00～16:00

場所：回生看護学院 3階大教室

10:00	開会 挨拶 図書室紹介	大阪回生病院院長 菊池 幹雄 図書室司書 加島 民子
10:15～11:00		ビデオによる図書館利用案内 講師 原 栄子 (羽衣学園短期大学)
11:00～12:00		[医学の基礎知識] 麻酔のおはなし 講師 久富 義郎 (大阪回生病院麻酔科部長)
12:00～13:00		昼食
13:00～14:15		看護系の資料について 単行書を中心に 講師 山添 美代 (元聖路加看護大学図書館)
14:15～14:30		休憩
14:30～16:00		外国雑誌の一括発注方式について 座長 泉谷 嗣郎 (大阪赤十字病院図書室) アクセス方式という販売方法について(仮題) 講師 一見 益男 (紀伊國屋書店) 丸善MACS2の導入例 講師 荒川 直子 (厚生連更生病院図書室) —アンケート報告— 近畿病院図書室協議会加盟機関における 外国雑誌の購入方法の現状
16:00	閉会	

研修会終了後 忘年会を開催する予定です。是非、ご参加下さい。